

旧米原機関区の痕跡① 一米原機関区の歴史一

交通の要衝として、今も昔も重要な米原ですが、今回は鉄道の面から見てみたいと思います。

米原市内に初めて鉄道が走ったのは、明治16(1883)年の長浜一関ヶ原の開業によるもので、このとき市内初の駅として設けられたのが春照駅です。当時の汽車は春照一長浜間を25分、関ヶ原まで40分程度で走っていました。ところが、春照を経由する路線は勾配がきついという問題があり、新橋(東京)一神戸間の東海道線の全線開通に伴い、わずか6年後の明治22(1889)年に廃止され、現在の天野川に沿った路線に代わります。このときに、東海道線と北陸線の分岐駅として設けられたのが米原駅です。

米原駅は、それまで長浜駅が担っていた鉄道基地としての機能が移されます。その機能のひとつが機関区です。機関区とは、列車をけん引する機関車に係わる業務一機関士の運用・運転業務・保守・整備などを担当する部署であり、かつては全国に187もの機関区が置かれていました。

米原機関区は初め駅の南側にありました。このときは蒸気機関車が主力の時代であり、大きな扇形機

関庫がありました。その後、昭和30(1955)年に東海道線の名古屋一米原間が電化されたことにより、機関区は駅の東北(岩脇地先)に移転されます。これは、蒸気機関車から電気機関車へと機関車の主力が移ったためです。

現在、米原市醒井宿資料館において、「鉄道のまちまいばら一「御召列車資料」初公開一」展を開催中(12月4日まで)です。米原機関区旧蔵の御召列車資料のほか、駅・機関区にまつわる鉄道資料を展示しています。ぜひご覧ください。(小野航)



▲さよなら蒸気機関車

情報 BOX

◆米原市教育委員会では、指定文化財を紹介した下記のパンフレットを作成しました。

『米原市文化財 一歴史・文化の交差点・まいばら』

※米原市には149件の指定文化財があります(国24件・国登録4件・県30件・市91件)。一覧表と分布図。62件の文化財の写真と概要を紹介しています。

◆米原市教育委員会では、下記の冊子を刊行しました。

『東草野のケシキ』

※重要文化的景観「東草野の山村景観」を、昭和時代の懐かしい写真と、早川鉄兵氏の切り絵で紹介しています。

◆米原市教育委員会では、2011・2012年に立命館大学文学部(矢野健一教授)と合同で、縄文時代の杉沢遺跡(米原市杉澤)の発掘調査を実施しました。

その成果をまとめた下記の報告書が立命館大学文学部から刊行されました。

『立命館大学文学部学芸員課程研究報告第18冊 滋賀県米原市杉沢遺跡発掘調査報告 一2011・2012年度の調査一』

※縄文時代の貯蔵穴や土坑が検出され、炭化した種実が多数検出されました。

◆滋賀県ミュージアム活性化推進委員会から下記の冊子が発行されました。

『ライブミュージアム琵琶湖(琵琶湖発日本史4) 伊吹の神が護る川 姉川』

※伊吹山文化資料館で取り扱っています。

◆◆編集後記◆◆

考古学を専門とする編集者ですが、近年建造物の修理に携わっています■名勝庭園の構成物件の青岸寺書院の屋根葺替え及び部分修理■地面の下のことはそれなりに経験もありますが、地面の上のこととはとんと…■委員の先生の厳しく温かいご指導のおかげで、順調に修理一年目が進んでいます■重要文化的景観の構成要素・唐白小屋茅葺屋根葺替え■最奥の甲津原集落に唯一のこる流水を利用した精米装置です。豪雪地なので雪が積まる前に完了しましたように…■西福寺さんが手がける遠州流茶室「燕窓廻」の移築復元工事。国友出身の茶人辻宗範が設計を指示した、格式のある、県内では珍しい茶室です■いずれも見学会や体験を企画し、完成後には利活用を図っていきます。乞うご期待■そんな編集者と思わず胸ときめいた出来事。7月靈仙山(1083m)の山頂付近で「こんなに見つけたけど」と、旧知の中村さん■手渡されたのは見事な「有舌尖頭器」。その日は寝るまで(夢の中まで)楽しい一日でした。(シャンギリッ子)

米原市文化財ニュース

佐 加 太 第44号

発 行 平成28年11月1日
編 集 米原市教育委員会
〒521-0242 滋賀県米原市長岡1206
米原市教育委員会歴史文化財保護課
TEL.0749(55)4552
印 刷 ビッグバードデザイン株式会社



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました

第44号

2016年11月1日

— MEET三成展協力 —

滋賀県米原市教育委員会

石田三成敗走ルートをたどる

天下分け目の関ヶ原

秋雨前線の合間に縫って、市の歴史講座で関ヶ原の戦いにおける三成の敗走路をマイクロバスでたどった。三成案内人として活躍されている田附清子氏(佐和山城研究会)とともに、市民40名が笛尾山三成陣跡(岐阜県関ヶ原町)から、田中吉政に捕縛された古橋(長浜市旧木之本町)までの推定ルートをたどったので、ここで紹介したい(地図参照)。

まず、関ヶ原合戦の経過から。ときは慶長5(1600)年9月15日。午前6時、東西両軍は布陣を終えたものの、盆地はあいにく濃霧に覆われて様子見を余儀なくされる。午前8時、東軍徳川方の井伊直政・松平忠吉隊が、宇喜多隊へ発砲して、戦端が開かれる。当初、西軍優勢で進むなか、午前10時には、徳川家康が南宮山北西山麓の桃配山から本陣を前進させたことで、少しずつ東軍が盛り返す。

午前11時、三成は南宮山の毛利・吉川隊、松尾山の小早川隊にのろしで参戦要請するも動かず、戦場のど真ん中に陣する島津隊にも参戦の気配がない。正午、突然小早川隊が松尾山を下り、味方の大谷吉継隊めがけて攻撃を開始、これに、山麓の赤座・脇坂・小川・朽木隊が呼応。吉継は支えきれず切腹。

これを機に、午後1時、西軍小西行長、宇喜多秀家が戦線離脱。2時、石田軍の猛将島左近・舞兵庫・蒲生郷舎らが奮戦、次々に戦死するなかで、三成は磯野平三郎・塩野清助・渡辺勘平を伴って戦線を離脱する。3時、島津隊が適中突破して、午後4時に東軍の勝利となり、関ヶ原の戦いは収束した。

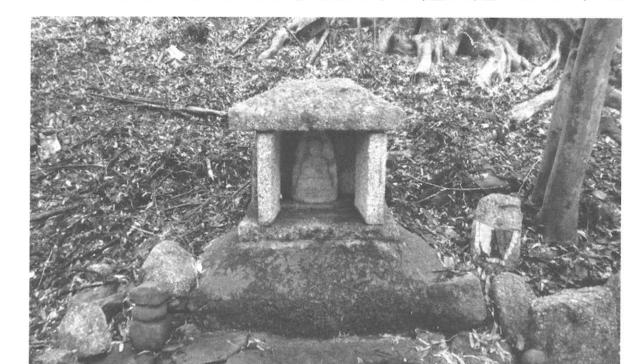
今年の大河ドラマ『真田丸』をごらんの方は、猿飛佐助の報告に愕然とする上田城の真田昌幸・信繁(幸村)親子のシーンが印象的だ。誰もが、東西約17万の大軍が対峙する戦いが、たった半日で終わるとは予想もしていなかった。再び戦乱が全国各地に飛び火し、チャンスをうかがっていたのは昌幸や黒田官兵衛だけではなかっただろう。

伊吹山麓の伝承

大阪城には豊臣秀頼が健在である。三成たち主だった西軍の諸将は、秀頼のもとでの再起を目指しただろう。三成が古橋で捕縛されたのは9月21日。再起をかけた6日間を追っていこう。

戦場を離脱した三成は、背後の伊吹山中に逃れ、春日谷を北上して新穂峠を越え、甲津原(米原市旧伊吹町)で姉川に出て…、草野谷を横切り…とされる。宇喜多秀家も小西行長も同じように伊吹山中に活路を求めているが、この伊吹山中のルートは不明である。田附氏はひとつの説を提唱された。西軍の後方には黄母衣衆という騎馬隊が控えていたとする絵図や資料があるという。三成は、戦の帰趨が定まるといち早くこの騎馬隊で、北国海道(北国脇往還)を西走したというのだ。常に計算だかい三成のこと、万が一の敗戦にも備えていた。これを裏付けるような伝承が街道筋の宿場町・春照(米原市旧伊吹町)にのこる(『伊吹町史 文化民俗編』)。三成が本陣で身を休め、いずこかへ去ったという。のちの詮議でこれが発覚した春照は、徳川軍により焼き討ちにあい、本陣の庭石にはその時の火痕があるという。さらに、田附氏は、再起のための目的地が、はじめから古橋だったというのだ。

伊吹山中には、美濃と近江を結ぶ主要な峠道だけでも11本ある。やはり伊吹山中に隠れ逃れ、いずれ



▲大政所の石祠

かの峠道で谷々を越えて古橋に向かうのが敗走ルートっぽい。しかし、北近江は三成の領国である。早々と北国海道を走り抜けた三成は、春照から姉川に沿って北上したのだろう。春照からの街道は平野部となり、領国とはいえ敗軍の将。村々が連なり身を隠す場所もない。

敗走ルートの推定 一東草野谷

田附氏は、『東浅井郡志 第二巻』(1971)記載の三成探索、敗走、就捕の項から地名を拾い、地図に落して、現在の道路で確認された。実際、三成が伊吹山中の11本の峠道いずれかで越えたとしても、現在、車では美東(岐阜県揖斐川町旧春日村)から東草野板並(米原市旧伊吹町)に抜ける国見峠しかない。当時の道は、いまのような山裾を切り拓いたものではなく、尾根を利用した最短の峠道である。しかし、これからの記述は、車が通れる道で三成をたどる。これすら、道幅ぎりぎりの鬱蒼とした道であり、現代人には三成の心境にわずかでも迫れる緊迫感を与えてくれる。

戦の収束後、東軍は敗残將兵の探索に移る。

- 「一. 石田三成、宇喜多秀家、島津義弘の三人を捕縛した者へ年貢を永久免除とする
- 二. 三人を討ち殺した者は金百枚を与える
- 三. 置った者は、その者は当然のこと、その一族、村全体を处罚する

九月十七日 田中兵部大輔吉政(花押)

これは、東軍田中吉政が北近江の村に出した書状である(『関ヶ原合戦史史料集』)。これにより、春照も全村焼き討ちという处罚を被ったのだろうか。

東草野の曲谷(米原市旧伊吹町)には、石田ヶ洞とよばれる炭焼き窯跡がある。「三成戦場を遁れ、本社裏道より字ムカイラに至り、炭焼き小屋に隠れ、炭焼某の綴衣を着し居たり、去りて後三成と聞き、里人ここを称して、今尚石田ヶ洞といふ」(曲谷「白山神社由緒調書」)。三成が東草野谷にひそかに現れたのは17日頃であるという。よく説かれる新穂峠経由で東草野谷の最上流甲津原に出るルートは、地図で確認してもかなりの迂回路となる。甲津原から下るにしても、曲谷まで約6キロもあり、難所石峠を



▲石田神社

越えなければならない。ここはやはり、春照から姉川を遡上したことにして。しかしなぜ曲谷なのか。二つ手前の吉楓からは七曲峠が上草野に抜けているのである。実は曲谷には、秀吉の母大政所の出生地との伝承がある。詳細は省くが、白山神社拝殿脇の石塔群の中に大政所の石仏を祀る石祠もある。実際、本能寺の変で長浜城が攻められたとき、大政所は北政所(秀吉の妻)とともに、曲谷の八畳岩で匿われ、美濃広瀬に落ちている。そんな所縁が三成をここへ招いたのかもしれない。

東草野谷は、美濃へ抜ける間道として敗走者を匿った伝承をもつ。古くは、壬申の乱で7人の武人たちが逃げ落ち。粟津で木曾義仲軍が敗北した際、書記官の覚明が曲谷に逃れて石臼作りを伝えた。本願寺顕如・教如は甲津原の行徳寺で村人の慰労を受け、村には両上人の名を冠した顕教踊りがいまも伝わっている。三成を匿った「炭焼某」をはじめ、伝統的に敗者が身を潜められる穏やかな谷なのだ。

敗走ルートの推定 一上草野から古橋へ

草野谷は、姉川上流の東草野と、草野川上流の上草野、下草野という水系の違う二つの谷から形成されているが、浅井郡に属する同一文化圏である。かつては、曲谷から上草野の草野(長浜市旧浅井町)に出る天吉寺越があり、三成はおそらくこれを越えた。対岸が西村である。車では、吉楓にくだり七曲峠で鍛冶屋(長浜市旧浅井町)に抜けるのが唯一の道である。われわれは草野川をわずかにさかのぼり西村にいたる。

谷口(長浜市旧浅井町)の伝承では、「上草野庄(西村)より山路谷口に至り、一民家について茶を求む。主人厚く之を遇す。三成感激して石田の姓と短刀を与えて去る」。いま、西村から谷口まで黒坂峠の林道がある。マイクロバスでぎりぎりいっぱい通ることができる。このあたりで、3人の家臣と袂を分っている。ここが田根庄である。その最奥の谷口集落は、明治29年の水害で流され、谷の南の開けた地に移転しているが、かつては、さらに谷に入った口にあり、氏神三輪神社が鎮座し、かの民家跡には石田神社が祀られている。谷口の地名は、単に地形的な名称ではなく、古橋を麓集落とする己高山への南からの入り口の位置に当たることを示す。林道は集落跡の真ん中を突っ切り、山田山の真裏を越えて古橋に出る。途中まで車での通行が可能である。谷口から古橋まで、山と山を尾根でつなぎだ道を「坊さん道(己高山参道)」と呼ぶ。谷口を南の玄関口に、すでに己高山佛教文化圏であり、山中に点在する社寺を最短距離で己高山頂観音寺(鷲足寺)と結ぶ道。修行僧しか知らない道を、法華寺で修行した三成は選んだ。幼

いころの習字の師である古橋の法華寺三珠院善説を訪ねる。『東浅井郡志』では、己高山の大門があったという高野(長浜市旧高月町)で夕暮れを待ち、古橋に向かっている。直接古橋に入るのを警戒したのだろうか。

三成が古橋を目指したように、同郷北近江三川(長浜市旧虎姫町)出身の武将田中吉政も、古橋の南、井口に陣所を置き三成を探索する。「(三珠院の)三成も安居なり難く、加へこの4、5日間、木の葉、落穂を拾い食いして胃腸を害し、歩行もなり難ければ、近くの茶園にかくれ臥しけるに古橋村の(葛原)与次郎太夫というものの、草刈にきてこれを見つけ、己が家に携え至りて切に之を養う。

9月21日、捜索隊に捕縛された三成は、大津城の家康の元に送られ、その後、堺、大阪、京を引き回しの上、六条河原で斬首となる。

古橋と三成

與志漏神社(古橋)境内の文化財収蔵庫「己高閣」に、法華寺境内にあった三成の母瑞岳院の宝篋印塔がある。一説に瑞岳院は、伊香郡杉野村の岩田氏の出身だといわれている。三成は、法華寺で寺小姓を務めていたともいわれ、寺の過去帳には、三成や兄正澄、母の戒名や命日が記載されている。

己高山は北近江的一大佛教文化圏である。伊香郡は「觀音の里」といわれるとおり、十一面觀音像を中心に多くの集落で古仏が守られてきた。なかでも、鷲足寺(古橋)の本尊木造薬師如来立像(重文)や、木心乾漆造りの木造十二神将像(重文)は、南都佛教の影響がうかがえ、己高山草創期を特徴づける8世紀末から9世紀の彫像である。『己高山縁起』(応永14(1407)年)には、近江の鬼門に当たり「古仙練行の秘窟」として、行基が伽藍創建し、越の泰澄が入峰、最澄が白山神の神託を得て再興したとする。縁起編さん当時、山頂の鷲足寺(觀音寺)を頂点に、支尾根上から山麓、平野部に石道寺、安樂寺、松尾寺、円満寺、法華寺、満願寺の7ヶ寺が展開しており、ほかにも高尾寺などがある。それぞれ12の僧坊や、50人の衆徒(『興福寺官務牒疏』)を抱えるなど大きな勢力を誇った。また、伊香郡南部の平野部までをその信仰圏としていた(己高山オコナイ36ヶ村)。

居城佐和山城はいち早く攻囲され、生まれ故郷の石田や大原觀音寺は主要街道に近く帰るすべもない。三成の敗走劇は、田附氏が述べるとおり、はじめから古橋を目指し、己高山山中寺の僧坊深く、再起を練り直す算段だったことが、伝承をつなげてルートを復元することで見えてきたのではないだろうか。

(高橋順之)

